

「生命の教育」創始者 谷口雅春先生 今月の言葉

# 夫婦が円満になるとき家庭は幸福になる

夫婦喧嘩は子供に強く影響する

夫婦喧嘩というものは、子供の教育に非常に影響する  
 のであります。実験心理学の実験に於て、皆さんの前に  
 一様に水を入れたコップを入れておいて私が水を飲め  
 ば、皆さんもその通りに水を飲まれる。それと同じく親  
 が心に怒れば、その通り子供の形に現れて来るのです。  
 これを児童の模倣性と申しております。親が夫婦喧嘩を  
 しているのを子供の時に見せておくと、子供が成人して  
 大人になると同じように夫婦喧嘩をするようになるので

あります。子供を叱る場合などでも、皆さん反省して御  
 覧になれば、きつと、自分が子供の時、親から叱られた  
 通りの言葉をいつて子供を叱りつけている事実に、み  
 ずから愕然として驚く事があるのであります。それは  
 知らず識らずの中に心の中に蓄積された観念が、長い  
 年月を経ても失われずに現れて来るのであります。そ  
 う考えると、何事でも悪い手本は迂濶には見せられない  
 と思わせられるのであります。

(新編『生命の真相』第22巻43〜44頁)

良人も妻も、真を備えている

現に悪しく現れている良人、または妻を、どうしてその善さのみを見ることが出来るでありましょうか。問うをやめよ。肉体としての顯れは人間ではないのであります。彼自身ではないのであります。真の人間は、真の彼自身は、肉体の奥に埋されている「神性」であり「仏性」であります。現われは如何にともあれ、常不輕菩薩のように、良人は妻の、妻は良人の、実相を觀て、その「神なるもの」を賞め讃えなければならぬのであります。「ああここに真実よき良人がいる」「ああここに真実よき妻がいる」「ああここに真実よい子がいる」「そう思つて皆様よ、家族の者たちよ、互に相愛せよ。

吾らすべての人間の实相は「神子」であり、「仏子」であり、どれほど讚嘆し合つても言い顯わすことが出来ない善美の真を備えているのであります。そう思つて人間を觀よ、良人を觀よ、妻を觀よ、両親を觀よ、子を觀

よ。そう努めるとき、その善さは次第にハッキリと見え  
て来るでありましょう。相對する人間が變貌し、家庭が  
變貌し、全世界が變貌し、全世界のすべてがその人の前  
で光り輝いて見えて来るでありましょう。

(新編「生命の實相」第24卷133〜134頁)

良人や妻の善さをどれだけでも深く信じる

良人又は妻の善さはどれだけ深く信じても好いので  
す。信じて信じ過ぎるということはないのであります。  
信ずれば信するだけ光を放つのです。信じていたのに裏  
切られましたというのは嘘であります。それは信じよう  
が足らず、信じていても信じていることの言葉又は態度  
での現わし方が足らず、信じていても相手の人格の自  
由をこちらの型に嵌め縛ろうとした場合が多いのであり  
ます。本当に相手の価値を信じていたならば相手をそん  
なに自分の型に嵌めようとはしなかったに違いありませ  
ん。自分の型に嵌めようとするのは、やはり、相手それ

自身にまかせておいては何か善くないことが起るに違いないと危惧するからであります。危惧は信頼の足りなさを表現でありましょう。(新編『生命の實相』第24巻130頁)

まず自分の心の中を光明に照らしましょう

およそ相手を良くするには自身を良くすることが第一であります。自身が良くならないのに相手をよくなし得るということとは困難であります。そしておよそ自身を良くするための方法は、自分の心の中に光明の精神波動を照り輝かすことであります。自分の心の中に光明の精神波動が波立っているときその人は善き人であり、自分の心の中に光明の精神波動が波立っていないとき、暗黒の思念が押しつぶさっているとき、その人は悪しき人なのであります。人の欠点を見るとき、その欠点に自分の心が捉われ、それとやかく言挙げするとき自分の心の中には暗黒の思念が波打たずにはいないでしょう。「暗黒の思念」は決して相手を良化することは出来ないのです。良人をよくしてやる

うと思つて小言をいう細君が良人を益々悪くするのは、細君の心の中に「暗黒」の思念が波打っているからであります。細君を良くしてやるうと思つて叱りつける良人が細君を良化し得ないのも、細君を叱るとき良人の心には「暗黒の思念」が波立っているからであります。相手を良化しようと思つるならば、先ず自分の心の中から「暗黒の思念」を除去しなければならぬ。先ず自分自身を、「光明思念」でみたさなければならぬ。換言すれば、相手の悪を見るような心になつてはならないのです。(中略)

妻は良人の実相の円満完全なる姿を見るようにするとき良人と完全に調和してしまつたのです。良人は妻の円満完全なる姿を見るようにするとき妻と調和してしまつたのです。親は子の実相を、子は親の実相を見、執着の念を捨て、神の完全な護りの中にあることを信じて、相手を神にまかせ預けると、親子は調和したものと成りしまつたのです。そしてその家庭は幸福の家と化し、その生活は天国浄土となつてしまつたのであります。

(新編『生命の實相』第24巻161〜163頁)